

うがたれた 校舎の裏の金網の うねる針金
 記憶の底の 幽かな蜻蛉 穴を抜ける
 時計のない 教室から ひとひら
 口笛吹く トカゲの屍骸 踏みしめ 踏みしめ
 夏草の香りが 黄泉から誘うと
 蜻蛉と少年は一つになって 口をとがらす
 ひゅうひゅう 爽やかなメロデイが
 世界の端から漏れだせば
 あわいで捻じれた少年の手首が
 ほうら そこかしこに転がっている

川辺にはたしかに葦がしげり
 堤の斜面は緑に刈り込まれていて
 予感などにも させはしなかった
 腰の曲がった老人が 少年にシケモクをむける
 彼は 慌てて手首を拾い 薄笑いで会釈した
 予感などにも させはしなかったはずなのに
 老人の擦ったマッチの火に せつな
 ありうべき未来を見たような気がした

閉域 +

硝子片 ぶちまけたみたいに 川面はいつも穏やかで
 つがいの鳥は ウムラウトの影を落とし 凧いでいた
 ひゅうひゅう 爽やかなメロデイが
 とろけた脳にしみわたり 少年はうつらうつら
 暖かな日ざしで 唇を焦がす

予感などにもしなかった こうなることさえも
 ただ そこから逃げて 煙を吐くだけ
 煙はアオクスンダ蒼穹にとけ にび色にひろがる

「なにも孕んでいやしないよ、そこには」
 見上げると 教師が対岸を指さしていた
 「いまだ、世界は閉じている」

少年／蜻蛉は 浅い眠りから覚め

セシウムを 喰らう

渡辺利彦

窓枠

時間を止めたからといって 視えるとは限らない
 鼓動を止めたからといって 死ぬるとは限らない
 散る花びらの ラピスラズリ 燃える
 流ルル涙の 窓枠の 内と外 震える

麗しい装いの 精神の労働が 際限なく搾取され
 浮遊するいまの 天使のごとき生の 不安の暗礁にて
 使いかつてのわからない 物と言葉の宛先は
 瞬く間に舵を失い 深くふかく水底に沈む

嗚呼 おれは人なのか おれは人なのか
 窓枠に手をあてがい 空をのぞむ
 嗚呼 おれは赦されているのか 赦されているのか
 窓枠に手をあてがい 部屋の隅をのぞく
 嗚呼 おれはお前の道具なのか おれは道具なのか
 窓枠という神の法は 力なくゆれる

抗鬱の媚薬が キャピタルの運動を加速させる
 病はモノと化した生の存在証明にすぎない

されど！ 病はモノと化した生の存在証明ですらある
 美しきドロモロジーよ
 生の存在証明の前に ひれ伏せ

嗚呼 君は人なのか 君は人なのか
 窓硝子を握りこぶしでがつんとやれば
 嗚呼 君は赦されているのか 赦されているのか
 窓枠は鮮血で濡れても 黙ったまま
 嗚呼 君はおれの道具なのか 君は道具なのか
 窓枠という神の理は 人の理にあらず

時間を止めたからといって 視えるとは限らない
 鼓動を止めたからといって 死ぬるとは限らない
 散る花びらの ラピスラズリ
 燃える

流ルル涙の
 窓枠の
 内と外
 震える

渡辺利彦

わたなべ としひこ

パウル・ツェランの『PSALM』という詩が好きです
 誰もいない何者かが、僕ら塵のような存在に対して息を吹きこみます。
 するとどうでしょう。僕らは花のように咲き、言葉を持ち、歌うのです。
 ツェランの「言葉」には色があります。緋色です。
 詩を書くということは、言葉に色をつけていくことなのかも知れません。